友史会 2024 年 10 月講座例会

令和６年 10 月 20 日（日）　13:00～16:30　橿原考古学研究所講堂

「展覧会の趣旨説明」　　吉村和昭　橿原考古学研究所附属博物館学芸課長

「もうひとつの甲の系譜―木製甲の世界―」
樋上　昇　愛知県埋蔵文化財調査センター調査課長
「前期の甲冑　その源流をアジアに辿る」
川畑　純　奈良文化財研究所主任研究員

（感想文）

橿考博 令和６年度秋季特別展「甲冑−古墳時代の武威と技術−」の講演を聴いて

十月二十日（日）、橿考博令和６年度秋季特別展「甲冑」の第一回目の研究講座を友史会では、講演会例会としています。

この日の講演は、始めに主催者橿考博学芸課長の吉村先生からの「展覧会の趣旨」、次に愛知県埋蔵文化財調査センターの樋上昇氏の「もうひとつの甲の系譜―木製甲の世界―」と題する講演があり、三番目に奈良文化財研究所の川畑純氏による「前期の甲冑・その源流をアジアに辿る」の講演、これら三つの講演で構成されていました。

吉村先生の「展覧会の趣旨」については、講演会終了後に見学した秋季特別展の印象に替えたいと思います。
古墳時代の甲と冑は図や写真では何度か眼にしていましたが、実物を見るのは今回、初めてでした。千数百年の時を超えて現れた数々の赤錆びた本物の存在感は圧倒的でした。
展示数の多い鉄製短甲群から受ける印象では、多数の小サイズの方形板や三角板を革で綴じた革綴短甲から比較的サイズの大きい少数の横矧板や三角板を鋲で固定した鋲留短甲への変遷が鉄板加工技術の進歩と量産化を志向していることが見て取れました。
鉄製甲冑は実用品ではあるけれど、多くは大小の首長を葬った古墳の副葬品として出土することを考慮すれば、威信財でもあったことは容易に推測できます。

次の講演は樋上昇氏の「もうひとつの甲の系譜 - 木製甲の世界 - 」です。
私は鉄製甲の以前は革製甲と漠然と考えていましたが、初めて木製甲が存在したことをこの講演で知りました。
木製甲は弥生時代中期から、鉄製甲冑が隆盛する古墳時代中期まで長く製作・使用されていたようです。
木製甲は鉄製甲に比べて出土例が少ないのですが、講演では鉄製甲を含む各時代の木製甲の大きさの比較が示されました。弥生時代のものは使用者の体形に合わせたオーダーメード、古墳時代に至っては鉄製甲のサイズとほぼ一致すること、すなわち、レディーメードが主流になるようです。

十月末、パソコンのネット上で、静岡放送番組として、弥生時代後期の伊場遺跡出土の短甲形木製甲（講演日配布の研究講座資料の十ページ目参照）の形だけでなく、彩色も復元されたとの記事を偶然、眼にしました。赤と黒の漆を基調に洗練された彩色でした。木製とは言え、弥生時代においても甲冑は威信財であったようです。

三番目は川畑純氏の「前期の甲冑・その源流をアジアに辿る」と題する講演です。講演に先立ち、川畑純氏は従来からの「短甲」の呼称を「板甲」へ変更する旨の提案がありました。西アジア、中国、朝鮮半島、日本列島での甲冑の歴史を横断的に見れば「短甲」は用語の汎用性に限界があるかも知れません。

この講演で川畑純氏から古墳時代前期に出土した甲冑の源流について以下のような提案がありました。

例えば、奈良県黒塚古墳、滋賀県雪野山古墳や京都府椿井大塚山古墳から出土した子札革綴冑・甲は中国前漢から西晋の甲冑が源流であること。

板甲（竪矧板革綴短甲）と附属具は中国戦国から秦の革製甲冑に源流がある可能性があり、鉄製板甲は朝鮮半島南部と日本列島にのみ伝搬したこと、等々でした。

実はこの秋季特別展に関連して、友史会の第八回大阪講演会が「甲冑」をテーマに実施されたことが、特別展研究講座の理解に大いに役立ちました。

樋上先生、川畑先生、そして吉村先生、お三方の非常に興味深いご講演、ありがとうございました。

奈良県 橿原市 原口憲次郎